

書評 Sandya Hewamanne, Stitching identities in a free trade zone -- gender and politics in Sri Lanka

著者	鹿毛 理恵
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	50
号	9
ページ	59-65
発行年	2009-09
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00007147

Sandya Hewamanne,

Stitching Identities in a Free Trade Zone: Gender and Politics in Sri Lanka.

Philadelphia: University of Pennsylvania Press,
2008, 287pp.

か げ り え
鹿 毛 理 恵

I

スリランカで初めて自由貿易地区 (Free Trade Zone: FTZ) が開設されたのは1978年のことである。1977年にメインの政党となったUNP (United National Party) が自由市場政策と開放経済政策を導入して、FTZ設置が進められた。本書の舞台であり、初のFTZに指定されたカトナーヤカ (Katunayake) はコロomboから29キロ北東に位置し、スリランカで唯一の国際空港の所在地でもある。その後、他地域にもFTZが設置されるようになった^(注1)。政府は海外企業に対して投資インセンティブ^(注2)を与え、外国資本を導入し、FTZでは海外有名ブランド物の衣類などが製造され輸出されている。衣料品・アパレル関連の工場の大きな特徴は、工場労働者の9割が女性であるという点である。

工場労働者たちの年齢層は18~25歳で占められ、多くが農村から出稼ぎに来た若い独身女性たちである。特に仏教を信仰するシンハラ系の女性たちが大多数である (p. 11)。女性たちの目的は、地方農村の農業賃金労働者またはその他インフォーマル部門の低賃金労働者である両親の家計を助けるため、弟や妹たちの教育費用をサポートするため、ダウリー^(注3)を自らの手で準備するため、将来に備えてお金を蓄えるためなどである。そうした階層の中学または高校^(注4)を卒業した者、または途中でドロップアウトした者たちが工具として工場へ働きに出るの

が一般的な傾向だという。

女性工場労働者たちは、長時間労働や深夜労働 (夜10時から朝6時) を時として前ぶれなく強いられる。さらに不十分な工場側の労働者に対する健康管理体制と乏しい公衆衛生設備など、こうした労働環境が労働者たちの健康状況に悪影響を与え、当該産業に関連した健康被害が労働問題関連・人権NGOなどによって報告されている。また、女性工具たちが直面する雇用環境として、工場の雇用者は既婚女性を雇うことを好まないため、結婚し子供ができれば工場での仕事を辞めることが一般的な慣行だという。また、年齢が30歳以上、大卒など学歴が高い女性も工場の雇用者は好まない。総じて女性工具たちの賃金は低く、工場側は女性工具たちに対し、昇給や昇進のチャンスをほとんど与えていないというのが今も昔も変わらぬ現状である。

工場周辺には地方から出稼ぎしてきた労働者たちのための民間の下宿や寮がある。そこでの生活環境は、先進諸国の基準からすれば劣悪といえる。典型的な例として、一部屋あたり10~12人の労働者が寝泊りし、ひとつのベッドも数人でシェアする。トイレやその他の設備も質・数ともに限られている。電気水道が不備な場所もあるという。さらに寮や下宿のセキュリティ、安全面にも問題が多いという。

しかしながら、スリランカの地方出身の女性工場労働者らにとって、コロomboやカトナーヤカといった都市部の工場で働くことは、田舎の伝統的で保守的な環境から離れられる機会であることは間違いなくない。なかには過去の不都合な事態や単調な生活から逃避するための手段になる場合もあるかもしれない。

FTZのガーメント工場 (衣料品製造工場) で働く女性には、その状況や特徴によって、ガーメントの出稼ぎ娘たち、純朴な田舎の娘たちとも形容される。こうした女性工場労働者たちに対する周囲のイメージや見方は、時としてセクシュアリティの観点から非常に辛辣で批判的なことがある。どれだけの割合で存在するのか定かではないが、女性工具の中には売春行為を働く者がおり、その場を提供する場所が工場周辺の街中にはあると現地の人々はいふ。また一方で、人権擁護者たちはいふ。女性工具たちは低

賃金で酷使されるため、様々な理由で工場労働だけでは十分な貯蓄が難しく、田舎に戻って錦を飾るためにも、やむを得ずそうした行為を働くのだと理由付ける。また、若い女性たちが、寮周辺の男性たちから誘惑され、最悪なケースでは、金銭を騙し取られたり、さらには結婚のあてもなく墮胎手術を繰り返すことが少なくないという。

本書著者、Sandya Hewamanneは、現在、アメリカの大学で教鞭に立つ人類学者である。著者は、スリランカのシンハラ系仏教徒の中産階級の家で育つ。コロombo大学で社会学を学んだ後、アメリカのテキサス大学大学院にて研究を続け、人類学博士号が授与された。著者のFTZ女性工場労働者に対する眼差しは、1995年8月に短期調査プロジェクトに参加し、当該女性たちと下宿先で一緒に過ごしたことに端を発する。その後、1999年8月に再びカトナーヤカを訪ね、女性工場労働者たちの生活実態について詳細な研究を実施した。その後、某日系企業の工場の許可の下、7カ月間に渡って工場作業現場にも通い、そこで働く女性工場労働者たちの実態について研究している。

II

本書の構成は以下のとおりである。

- 第1章 序論
- 第2章 ナショナリズム、モダニティ、女性のモラルリティ
- 第3章 作業現場
- 第4章 忠実な娘、政治的に活動的な労働者
- 第5章 日々の対立
- 第6章 不謹慎な行動
- 第7章 FTZでの服装と故郷での服装
- 第8章 メイドイン・スリランカ——グローバル化とその政治的立場——
- 終章 用心深い声

第1章は、本書の導入部分である。著者はここでスリランカのFTZの背景について紹介し、自身がFTZ女性工場労働者たちと幾年にも渡って交流し、

生活実態について調査し、本書執筆に至るまでの経緯を述べる。続いて調査の手法と目的を記述している。著者はスリランカFTZ女性工場労働者たちの主観性がどのようなものであり、自己認識とアイデンティティがいかに形成されるのか明らかにしていくことが目的であるとしている。著者は題名を付けるにあたり、Kondo (1990) とHall (2000) らによる女性工場労働者のアイデンティティに関する研究書に刺激を受けたという (p.14)。また、Foucault理論の弱点を認識しながらも、対話によって自己認識され、アイデンティティが形成されるものとした (p.15)。そこで著者は、心理学的作用の分析は検討せず、エージェンシーとストラテジーを分析の対象として捉えたとした。FTZ労働者らが工場での職場関係や地位、寮や下宿先での対話や行動、休暇の過ごし方や服装、故郷での言動や振る舞い方など、場所や立場ごとに綿密に観察している。そこから女性たちのアイデンティティがいかなるものか検討したいとしている。

第2章では、英国による植民地支配時代から、独立、および現代に至るまで、国内外の研究者や知識人、宗教家 (宣教師など) や教育関係者によって描かれた論文や書物、女性の婚姻やその慣習に関する法的・制度的な記録書に関する研究書など、主に文献研究を展開している。植民地支配から、ナショナリズムの台頭とモダニティの中で、教育制度、宗教、文化や慣習がどのような影響を受け、結果として女性のモラルリティがいかに認識され、スリランカ女性の理想像形成にどう作用してきたのか議論し検討している。

それによれば、植民地時代にイギリス人たちによって描かれたスリランカの婚姻の慣習や現地女性に対する見方は、一方的な批判と偏見、時として侮蔑に満ちたものがみられた。英国統治下のもと、キリスト教を普及するための教育機関が設立されたが、その女性教育者たちは、現地女性たちをキリスト教徒に改宗させることが道徳心と教養を身につけさせることだと考えていた (p.27)。こうした植民地支配者側の一方的な論調または態度がエリート階層の現地男性たちに屈辱を与え、反感を生じさせたのは

間違いない。この過程を通して、シンハラ仏教徒を意識したナショナリズムが次第に高揚してきたのだと著者は続ける。Obeyesekere (1970) は新しい価値システムの到来を、プロテスタント仏教 (Protestant Buddhism) と形容した。つまり植民地化とキリスト教化によって衰退していく中で出てきた価値システムであり、ある意味プロテスタントのモラルに則った新しいイデオロギーであると説明している (p.29)。著者は、代表的なシンハラ仏教的ナショナリストとして、ダルマパーラ (Anagarika Dharmapala) とシリセナ (Piyadasa Sirisena) の2人を挙げている (pp.29-32)。ダルマパーラはパーリ語で残された仏教の経典を引用して、夫の役割と妻の役割について論じ、男性の地位は公共の場にあり、女性の地位は家庭にあると説いた。こうした性的分業によって、信仰心と道徳心、教養のある、洗練された新興国家にふさわしい女性を育成し直すという意図があった。ダルマパーラは古いパーリ語の経典とアジアの神話をもって英国植民地支配の思想に対抗しようとしたのである。ダルマパーラは植民地支配者たちと同じ論理を用いて、植民地支配が仏教徒社会の崩壊に影響を及ぼすまでその社会が英国支配者の価値を支持し続けてきた事実を批判することによって、植民地主義が信用に値しないものなのだと主張したのである。ダルマパーラの親しい朋友で国家夢想家仲間でもあった、小説家シリセナもまた同様に、新興国家にふさわしい理想的な貞淑女性のモデルを描いた。このような思想をメディアはこぞって取り上げた。

1948年の独立以降、新しいスリランカの指導者たちは、プロテスタント仏教とその儀式的行事を国家的文化の基礎に据えたのである。広告媒体、映画、歌謡、詩、小説や教科書を通して、村、女性、家族とセクシュアリティの理想像を大衆意識の中に鮮明に描き込んだ。それらは、村と都市、善と悪、西洋化と伝統という対義関係を用いてシンハラ映画の中で物語られた。著者は具体的な例として、アベセーカラの分析を引用している。シンハラ映画に出てくる良い女性像とは、忍耐強く、自己犠牲的で、苦難も快く引き受け、国家権力に服従する受動的な美徳

を兼ね備え、見た目にはやさしい笑みをうかべ、わずかに伏し目がちで、攻撃的ではない女性だと述べている。一方、悪い女性とは、西洋文化の影響を強く受け、ズボンをはき、攻撃的で、声が大きく、道徳心がゆるいキャラクターとして演じられているという。多くの映画の中で、このような悪い女性は公衆で屈辱を受け、深い悲しみ、病氣や死に直面する役柄でもある (p.33)。植民地支配を受ける以前は、シンハラ人たちの間で結婚時に処女であるべきという考えはなく、この価値観もまた、プロテスタント仏教の倫理の一部として発展したものだという。また、サルポーダヤのコミュニティ開発もプロテスタント仏教の普及に大きく貢献した。さらに仏教徒の両親たちは、子供らに仏教を学ばせるため、日曜日に寺などで開かれるスクールに通わせる。特に、この宗教的日曜学校を通じて、若い女性たちは「恥と恐れ」という社会規範も学ぶのである。プロテスタント仏教のイデオロギーの下、独立以来より開発指導者たちに影響を与え、そうした限定的な社会規範がスリランカ女性を、父や夫など家族に守られるべき、良き娘、良き妻、良き母のいずれかになるべきだと規定している。その結果、特に未熟練女性たちに対して中近東諸国への出稼ぎとFTZでの雇用機会への道が開かれるまで、女性たちは国家開発プログラムの潜在的ターゲットグループから見落とされ続けてきたのだという (p.35)。しかし著者は指摘する。たとえ女性たちに雇用機会が与えられても、特にFTZでの仕事内容や労働・賃金、その他の条件は家父長制的理解の下で女性労働者を位置づけている。つまり、「敏捷な指先と従順さ」を持つが、金と現金がダウリーとして十分に蓄えることができたなら、即、仕事を辞めてしまうという仮定のもとで女性工員の雇用条件を定めているという。そうした推論的な解釈によって経済的・社会的・生活の主流的システムから女性が排除される結果になっている。しかし、こうした女性が陥りやすい経済的・社会的な排斥のあり方は、それぞれの社会階層グループによって異なった形態を取り、また、すべての階級の女性たちが日々の生活の中で、それら推論的な解釈に対して異なった対応で切り抜けていくものだと著者

は指摘する。

また本章では、現代のFTZの女性工場労働者たちが、政治家によってどのように言及され、さらに一般人々から具体的にどのように認識されているかも述べている。特に一般大衆が抱く女性工場労働者たちのイメージは、テレビなどのメディアや出版物、歌謡曲などを通してうかがい知ることができると同時に形成されるものでもありとし、いくつかの代表的な作品を紹介している。端的に述べると、地方の貧しい農村から出てきた純粋な娘が都市のFTZで働くことによって、次第に消費文化に毒されるというものであったり、または工場労働者からセックス・ワーカーに陥ってしまったというストーリーなどを紹介している。他にも、FTZの女性労働者自身が書いて投稿した体験に基づく雑誌^(注5)や、NGOが出版している雑誌なども挙げられていた。

第3章以降は著者のフィールドワークによって得られた情報を分析し、議論を展開したものである。この章では、著者の作業現場での具体的な労働環境、工場労働者たちの作業服、給料や勤務時間、食事内容、研修方法、上司との関係など実体験に基づいた工場内部の様子が描かれている。目に見える違いを認識しながら、女性工場労働者の工場内での立場・状況を分析している。それらを踏まえつつ、労働者たちとの対話を通じて女性たちが他者との違いをどのように捉え、自己を認識し決定づけていくのか丁寧に観察し分析している。著者は、日々の社会的相互作用と感情表出の場は、択一的なアイデンティティの駆け引きが継続的に生じる空間でもありと考える。具体的には農村から出てきた若い女性たちがFTZのライン労働者としての認識を強めると同時に、彼女たちが仕事上のアイデンティティと初歩段階のプロレタリア意識を発展させる空間が存在すると思われるのである。しかしこの新しい解釈は、産業労働者が常に年齢、階級、カースト、出身地、さらにはシンハラ仏教徒なのか否かなどの従来の認識要素を複雑に絡み合わせて設定することによって可能となる。つまりこれらの特徴を意識することが、作業現場において、娘、姉妹、恋人、腹心を打ち明ける友人、または政治的活動家といった様々な自我の所在

を労働者は認識するようになるのだという。著者は作業現場で知り合った女性工場労働者たちのグループに入り、上記のそれぞれ役割を担っていた数名を選び、親密な交際を通して対話を繰り返し、本章で個々のケーススタディとして実例を取り上げ分析を実施している。

第4章で著者は、FTZでの仕事を通じて、女性たちの心の内部で階級意識と既存の文化的認識とが相互に絡み合った意識が生まれると主張する。そして、次のように結論付けている。女性労働者たちの持つ一体感が、特定の状況や場面での女性たちの反応に影響を与えている。さらに労働環境や工場内での人間関係が、仕事に関連する団結意識を芽生えさせ、規則を生じさせる。つまり、女性が工場労働者として経験を積むに従い、労働者の権利のために闘う必要性を認識した一人のライン労働者としての意識が高まっていくのだという。著者の調査方法は人類学的手法であり、具体的に作業現場での女性労働者たちの用いるストラテジーに注目して、女性工場労働者たちとその他の役職者との言葉の選び方や会話でのやり取り、仕事上の涙と感情表現の涙の使い方、呪いや伝統的魔術などの脅威の使い方、辞職と交渉の切り札をどう用いるのか、深く観察している。さらに、作業現場の女性たちがラインごとに形成される複数の昼食グループに出入りしながら、グループ間の関係性や、グループ内で繰り返られる女性たちのおしゃべりの内容に耳を傾け、また対話を通じて、その結成力、階級意識、女性たちのフェミニズムなどを分析している。その他、工場内の医務室での休憩や休暇の取得状況なども分析の対象とし、ストライキについても詳細に観察し、労働者の意識やその後の職場および個人への影響についても検討している。

第5章では、下宿先での女性工場労働者たちの生活環境や日常生活について触れている。下宿の家主たち数名が登場し、家主が関わってきた女性たちとそこで目の当たりにした様々な女性たちの行動や個人的な問題などが語られる。また家主たちがどのような方法で女性たちを管理しているのか、例えば男性の出入り許可などについても言及している。その

中で下宿の役割とは何であるか論じている。下宿先では、女性たちは出身地ごとにわかれて部屋をシェアしているという。カーストという伝統的な区別は影響せず、何か新しい差異を労働者たちの間で作り出しているようだと言っている点は興味深い (p.138)。さらに、女性たちからの信頼おける情報と著者と女性たちとの親密な対話に基づいて、FTZ周辺の男性たちとの駆け引きや恋愛模様、下宿先での情事などが描かれている。女性労働者たちは、農村に留まる女性たち、中産階級の女性たち、そして男性産業労働者たちとは異なる自己表現や振る舞いをしているという。彼女たちは完全に農村の女性でもなく、都市の女性でもない、新しい類の女性だという認識が、実際の振る舞いや行動、そしてそれら事実に基づいて語られる話と書物によって生まれたのだと結論づけている。最後に著者は、FTZの労働者たちが不当な差別を受けているグループだとはどうしても言えないと述べている (p.176)。

第6章では、下宿先周辺にあるパブリックな空間での女性たちの振る舞いや行動、消費性行や服装などの好み、また女性たちの間で流行する音楽やダンスといった娯楽など文化的側面に焦点を当てて女性たちのプライベートな表情を分析対象としている。ここで著者は、スリランカのFTZ女性労働者たちは、第三階級の市民(労働者階級)としての意識が強く、中産階級に従いたくないと主張するだけでなく、彼女たち独自の流行と嗜好を貫き通しているという自負を多大に誇示していると指摘する。さらに他の若い世代の都市部出身の労働者階級者とも一線を画す。FTZ労働者たちは田舎の伝統と慣習を保ちつつ期間限定的に都市部に出稼ぎしてきたのだと世間は捉える。そのため都市部の若い労働者たちが取る行動がノーマルだと思われても、彼女たちが同じ行動を取れば、ある種の戒律を破ったものとみなされる。女性たちもそれを認識し、逆手に取って行動する。またFTZ女性労働者たちは中産階級ではなく、都会的でもなく田舎のコミュニティにも属さない。また、現代的でもなく伝統的でもない。そして明らかに男性ではない。しかし低所得者層には該当する。それゆえFTZ労働者は何か特色あるコミュニティとして

のアイデンティティを確立したのだと著者は結論づけている (p.213)。

第7章では、著者が親しくなったFTZの女性労働者数名の故郷を女性たちとともに訪ね、女性たちが工場周辺の環境から離れたとき、どのような変化が起こるのかを逐一見逃すことなく観察し、村での服装と振る舞い方、家族や親戚、近所の人々、年配の人々との接し方などを細かく分析し、個々のケーススタディとして紹介している。著者が目の当たりにした光景は、女性たちの多くが故郷に戻ると、特に両親や年配者の前で、服装から化粧方法・アクセサリーを変え、まるでまだまだ純真無垢な娘といった役割を演じたという。著者は、女性たちの見た目やジェスチャー、感情の表現方法などを通じて女性たちが語り方を変えるということは、彼女たちの行動を抑制する社会的・文化的な規制・慣習への対応であるという。一方で、女性たちは、FTZ周辺で起こる男女間の秘密の情事や恋愛ごと、その他の娯楽的情報など、雑誌や音声テープ、都市やFTZ周辺のマーケットでしか手に入らない下着やその他などをこっそりとしのばせ村に持ち帰り、まだ村から離れたことのない年下の女性や親友たちに密やかに見せたり提供したりしている。この行動は村で女性たちが受ける社会的・文化的な抑制に対する抵抗を意味すると著者はいう (p.224)。

第8章は調査・研究の結論部分である。著者は、自己の研究評価を行いながら、明らかにしたことが何であるか述べている。著者は女性たちが服装を替えることは、彼女たちのアイデンティティの変化を隠喩するものだと本書の中で頻繁に議論してきた。それは、出稼ぎ女性たちのアイデンティティ構築方法を調査・分析の対象としていることから、衣類製造に工場労働者として携わる女性たちの象徴的機能の重要性を強調するにふさわしい題材だったと評価している。また、ダルマバーラたちがシンハラ仏教徒女性のパブリックな衣装が信仰心ある道徳的なものとして諸著書の中で記してきたように、一世紀以前に創られたシンハラ仏教徒女性の理想像は、女性にそのような装いを与えるだけのものだった。しかし、それらは女性の下着の領域まで言及し得ていな

い。それに関する規則や標準は男性のそれとは全く異なるものだと著者は指摘する (p.226)。つまりそれまでの性別分業の議論では、センシティブな部分、おそらく女性の抑圧を受けやすく表出しにくいアイデンティティや隠されがちな自己表現、その手段を見逃してきたのだという。また、著者は「恥と恐れ」についても言及する。対置意識の発展の一部として、女性労働者たちは次第に「恥と恐れ」を持つ田舎娘から、行動および性的な規範を破る女性へと変貌していく。一般的に女性工場労働者が労働者として女性として搾取されているという議論に反して、著者が観察したのは、女性たちが物質的、肉体的、感情的快樂を追求し、事が悪化すれば多少の責任を取っていたというものだった。また、著者は他国のFTZの女性労働者研究と比較し、スリランカFTZ女性労働者の特徴が、郷里を離れた時にだけ、『良き女性』像を払拭するような行動を取ることで自己を表現するという。また、エンパワーメントについても考察している。女性たちが仕事を辞めることで経済的・社会的パワーは衰えていくが、しかしそこで得た新しい知識や、自分に変化が生じたことで、村へ戻った後、女性たちが何らかの変化や貢献をもたらす得るはずだと考えている。しかしながら、やはりFTZでの仕事の現場では、社会的・政治的参加の場を女性たちに与えているとはいえ、女性たちが持つ特殊な性的かつ階級的な主観性がその参加範囲を限定的なものに留まらせている。また、都市部のスラム居住者ですら、居住地域での権利と公共物および公共サービスに関する投票権を有すが、出稼ぎ労働者たちにはその投票権が全く与えられていない上に、故郷の村で投票に参加するための休暇も工場から与えられない。それゆえ、女性たちはカラフルな衣装を身にまとい生きていくことが彼女たちなりのパブリックな空間での批判・抵抗方法なのである。そしてFTZでの生活圏周辺の社会的・商業的な世界を形成するのだと著者は結論づけている (p.231)。

そして終章にて著者の議論が締めくくられる。2006年に再び調査を開始し、03年から04年にかけて実施した調査の期間中に会ったFTZ労働者たちのその後の様子や意識を調査し、前回と比較しながら

分析を実施している。

III

本書は、長期に渡ってFTZの女性工場労働者たちを対象に調査を実施し、既存理論と一般論とを照らし合わせながら、著者独自の議論を展開している。研究・フィールド調査手法の分野も含めて、十分に高い評価を得る学術作品といえる。

しかし、印象的だったのは、同じシンハラ系信徒であり、女性たちとともに働き過ごし、親密な交際を深めながらも、一貫して著者が客観性を保ち続けたことである。おそらくそれは、スリランカに明確な社会的、経済的、伝統的な階層性または階級性の存在が、著者に客観的な視点の維持を容易にさせたのではないかと。著者はスリランカの都市中産階級に生まれ、高等教育を受け、専門知識を活かして渡米し、専門職を続けながらも同階層の男性と結婚して米国に生活の拠点を移している。著者の仕事は人生を通じて、継続性と発展性が保障されている。一方、FTZ縫製工場の女性労働者たちの多くは貧しい農村に生まれ、学歴は高くなく単純労働に従事する。時期が来ればFTZを去って村へ戻り、結婚して子を育てるという型通りの生き方が待っている。つまりFTZの女性たちの仕事は人生の中で継続性と発展性が保障されていない。FTZでの就労は期間限定的であり、彼女たちの人生の中で断片的な位置づけなのである。また、村社会の閉鎖的な環境で生まれ育った彼女たちは、都市部FTZ周辺に住んで初めて郷里以外の人々や文化と遭遇する。新しい出会いに戸惑いながらも先輩女性労働者の姿・行動を真似しながら、彼女たち自身の立場を認識しアイデンティティを形成する。そして派手な服装や下着、行動で自己表現するのである。

FTZの女性労働者たちのような問題の当事者が、現状と自己について客観的に語ることはできない。やはり、人生や階層の異なる者でもない限り、FTZの彼女たちの生き様に興味がわかないだろう。結果的に著者は彼女たちの代弁の役割を果たしたといえる。しかし著者は、彼女たちの期間限定的な外見と

行動の分析に終始しただけだったとも評価できる。著者とFTZの女性たちの間にある、どこか固定的な格差の存在理由を分析することで、より明確にFTZ女性労働者のアイデンティティが明らかになるのではないかと感じた。

(注1) カトナーヤカに続いて、Biyagama, Koggala, Mihintale, KandyにもFTZが設置されている。

(注2) ここでいうインセンティブとは具体的に、機械や原料の輸入免税、輸出免税、優遇税、二重課税控除、配当金の無制限本国送還、最大100パーセントまでの外資所有の許可に加えて、低コストで訓練可能な労働者の存在である (p.10)。

(注3) 新婦側による結婚持参金、嫁資。スリランカでは、地域性、民族性、階層によって多少ダウリーの重要度や規模が異なるようである。

(注4) スリランカでは、オーディナリー・レベル (GCE Ordinary Level) とアドバンス・レベル (GCE Advanced Level) と呼ばれる。日本でいう中学校と高

校に相当する。

(注5) Hewamanne (2006) を参照されたい。

文献リスト

- Hall, Stuart 2000. "Introduction: Who Needs 'Identity'?" In *Question of Cultural Identity*. eds. Stuart Hall and Paul Dugay. London: Sage Publications.
- Hewamanne, Sandya 2006. "Pornographic Voice: Critical Feminist Practices among Sri Lanka's Female Garment Workers." *Feminist Studies* 32(1) (Spring).
- Kondo, Dorinne 1990. *Crafting Selves: Power, Gender, and Discourses of Identity in a Japanese Workplace*. Chicago: University of Chicago Press.
- Obeyesekere, Gananath 1970. "Religious Symbolism and Political Change in Ceylon." *Modern Ceylon Studies* 1 (1): 43-63.

(佐賀大学大学院工学系研究科博士後期課程)